

私にとっての縮小社会 人口問題と幸せ

2013年3月 小川正嗣

縮小社会を語る上で論点とすべき問題は、山のようにある。エネルギー問題、環境問題、食糧問題、社会保障など細かい物まで挙げればきりが無い。しかし数ある論点の中でも最も注目すべき論点だと私が考えているものが、人口問題である。

『縮小社会への道』での「縮小社会」という用語は「資源の消費を少なくし、生活の質を維持したままの幸せな社会」という意味で使われている。もちろんこれは私も大いに賛同する社会であるが、現実的なことを考えると達成はそれほど容易とは言えないだろう。

例えば現在の日本に縮小社会研究会の提案する縮小概念が広く受け入れられ、国民全員が縮小を志向して生活を営むとする。一見、縮小社会は達成されたかのように見えるが、隣国へ目を向けてみればどうだろうか。縮小社会は達成されていない。いくら日本が資源を節約しようとそれだけでは効果が小さ過ぎる。つまり縮小社会という用語を使用する時に本来考えねばならない社会の範囲とは、一国のみではなく世界なのだ。

国際的に資源使用量の縮小に関する問題を扱う場合には、新興国や発展途上国からお決まりの反論がある。「先進国は自国の発展のために資源を消費し続けたのに、いざ我々が発展する番になると資源を節約せねばならないなどという話は不公平で到底受け入れられない」というものだ。確かに納得のいく反論である。このような反論を繰り返す国や地域を相手にいくら資源使用量の削減を求めたところで、それは国際関係を悪化させ事態を望まぬ方向へ導くだけである。新興国や発展途上国に限らず、資源使用量の縮小を求められ本当の意味で前向きな返答を考えてくれる国は珍しいのではないだろうか。そうであるならば縮小社会という目的を達成するために、別のアプローチも必要であろう。

そこで出てくる発想が人口問題を切り口とした議論である。人口問題ならば、世界的に問題となっている上に地球全体での問題という認識も共有し易いであろうから、議論を交わすのに資源の問題ほどは皆抵抗がない。そして資源使用量を縮小することと人口を削減することは、資源量を物差しとした場合、等しいのである。これは一例であり、人口問題の解決は他の様々な問題を解決するためにも有効であると言える。いずれにせよ大事なことはそれぞれの国や地域にとっての、ひいては世界中にとっての持続的な幸せを考えて議論を進めることである。

幸せを考える、これは原点にして一番の難題である。多くの国や個人の行為は良心から発せられ、皆幸せを希求している。しかしながら現代という世界はルネサンス期の西欧の影響で確立された部分が多く、多くの人の幸福観もその上にある。残念ながらその西欧由来の物の見方に支えられてる現在の幸福観は既に行き詰りつつあると言えよう。では人間の真の幸せとは何であろうか。縮小社会には大きな思想的パラダイムシフトも必要である。